

国大協
TOPICS

国立大学協会 第1回通常総会を開催(6/14)



総会の様子

国立大学協会は、6月14日(月)に、令和3年度第1回通常総会をWeb会議にて開催しました。

総会では、役員の任期満了に伴い役員の改選が行われ、会長に永田恭介 筑波大学長、副会長に大野英男 東北大学長、西尾章治郎 大阪大学長、牛木辰男 新潟大学長、林佳世子 東京外国語大学長がそれぞれ就任しました。

また、理事会の審議状況及び各委員会・各支部の活動状況の報告があった後、会長から、国立大学協会創立70周年記念式典の開催、大学入試の在り方に関する検討会議、経団連「採用と大学教育の未来に関する産学協議会」、国立大学法人ガバナンス・コードにかかる適合状況等に関する報告書、総合科学技術・イノベーション会議「世界と伍する研究大学専門調査会」、文部科学省「第4期中期目標期間における国立大学法人運営費交付金の在り方に関する検討会」、科研費の研究期間延長の特例措置継続の要望書提出等について報告がありました。

その後、国立大学の2023年度入学者選抜についての実施要領、第4期中期目標期間へ向けた国立大学法人の在り方について一強靱でインクルーシブな社会実現に貢献するための18の提言—等について承認されました。

総会後には会長・副会長による記者会見を開催し、永田会長は就任に当たって「86の国立大学が使命をしっかりと認識したうえで、その機能をさらに拡張・充実させ、第4期中期目標期間に向けて前に進んでいく」と述べました。

上記の内容については
国大協ホームページ
(<https://www.janu.jp/>) から
ご覧いただけます。



特集

進化し続ける大学図書館

OPINION

早稲田大学図書館長
早稲田大学法学学術院教授

ゲイ ローリー

国立大学協会
The Japan Association of National Universities<https://www.janu.jp/>

国立大学 vol.60 July 2021

編集・発行 / 一般社団法人 国立大学協会 〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2 TEL: 03-4212-3505

国立大学協会

The Japan Association of National Universities

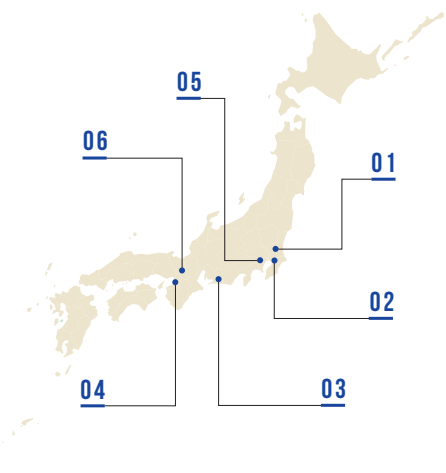
【特集】
進化し続ける
大学図書館

LEADER'S MESSAGE
信州大学長
濱田 州博 03
空間を超えて架け橋となる大学図書館

OPINION
早稲田大学図書館長
早稲田大学法学学術院教授
ゲイ ローリー 05
対話を育み、思索を深める、
人が主役の大学図書館を目指して

Challenge! 国立大学

01 筑波大学	09
視覚障害等のある学生に向けた 資料の電子化を推進	
02 千葉大学	10
空間・コンテンツ・人的支援を有機的に 結合する支援基盤を構築	
03 浜松医科大学	11
学修を支援し卒業生や地域にも開かれた Society5.0 型図書館へ	
04 大阪大学	12
大学図書館と公共図書館が一体化した、 新たな社会連携の形	
05 東京学芸大学	13
本のある図書館空間・ 書架ブラウジングをオンライン化	
06 京都工芸繊維大学	13
図書資料を「見せる / 魅せる」ことで 新たな情報発信	
『大学図書館、最前線』	14



会長に永田筑波大学長を再任

2021 年 6 月 14 日 (月) に令和 3 年度第 1 回国立大学協会
通常総会を開催し、任期満了に伴う役員の改選を行いました。
新役員の任期は、2023 年 6 月に開催される総会までです。

会 長 (理 事)		
永田 恭介	【筑波大学長】	
副 会 長 (理 事)		
大野 英男	【東北大学長】	
西尾 章治郎	【大阪大学長】	
牛木 辰男	【新潟大学長】	
林 佳世子	【東京外国語大学長】	
専務理事		
山口 宏樹	【前埼玉大学長】	
常務理事		
戸渡 速志	【国立大学協会事務局長】	
理 事		
寶金 清博	【北海道大学長】	
空閑 良壽	【室蘭工業大学長】	
穴沢 眞	【小樽商科大学長】	
玉手 英利	【山形大学長】	
田中 雄二郎	【東京医科歯科大学長】	
益 一哉	【東京工業大学長】	
中山 俊憲	【千葉大学長】	
齋藤 滋	【富山大学長】	
松尾 清一	【東海国立大学機構長】	
湊 長博	【京都大学長】	
今岡 春樹	【奈良女子大学長】	
伊東 千尋	【和歌山大学長】	
槇野 博史	【岡山大学長】	
岡 正朗	【山口大学長】	
櫻井 克年	【高知大学長】	
石橋 達朗	【九州大学長】	
佐野 輝	【鹿児島大学長】	
監 事		
上田 孝典	【福井大学長】	
田野 俊一	【電気通信大学長】	
会長補佐		
藤井 輝夫	【東京大学長】	
中野 聡	【一橋大学長】	
長谷川 眞理子	【総合研究大学院大学長】	
山崎 光悦	【金沢大学長】	
野田 敦敬	【愛知教育大学長】	
平川 南	【人間文化研究機構長】	



コロナ禍は、世界中の人が改めてこの世界の在り方について思いを巡らせる契機となりました。様々な地球規模の課題が浮き彫りになり、誰もが社会を取り巻く問題について真剣に考えるようになりました。これからの日々はコロナ禍以前の状態に戻ることはありません。この状況の中で、国立大学の役割について改めて考える必要があります。

国立大学は、人口減少、高齢化などの先進国の課題を抱える我が国において、産業の知識集約型化を含むデータ駆動型社会へのパラダイムシフトを背景に、レジリエントでありインクルーシブなより良い新しい日常を確立するための中核を担う公共財です。多発する自然災害や新型コロナウイルスに代表される新興・再興感染症への備えと対応、科学技術の発展がもたらす課題の解決など、国立大学に対する期待は一層高まっています。全ての都道府県に置かれている国立大学は、イノベーションの創出や優れた人材の育成を通じて、各地方（地域）の文化・社会・経済を支える拠点であるとともに、地方（地域）の産業、医療、福祉、教育などに責務を負っていることを自覚しています。

令和 4 年度から始まる第 4 期中期目標期間においては、各国立大学は社会からの期待に応えるために個々の特色を発揮し、経営の自由度を高め、機能の強化と拡充を進めます。そのためには、国民に対する説明責任を果たすだけでなく、エンゲージメント型の信頼関係を深めることが必要です。

地域と国を支え、世界と伍していく 86 の国立大学は個々の特色を最大限に活かしながら、また互いに協力し総体として、多様なステークホルダーとともに前進してまいります。そして、それを支えることが国立大学協会の使命だと考えます。

関係各位には引き続きご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

会 長 永田 恭介

(任期) 2021 年 6 月 14 日～
2023 年 6 月総会

空間を超えて架け橋となる大学図書館



信州大学長 濱田 州博

信州大学は、長野市、松本市、上田市、南箕輪村の4市村に5キャンパスを有し、8学部・大学院5研究科を有する総合大学であり、人文学、教育学、経法学、理学、医学、工学、農学、繊維学の幅広い分野で教育・研究を行っている。長野県4地域、北信、中信、東信、南信それぞれに点在しており、言ってみれば「信州」全体がキャンパスと呼べる。自然豊かな環境でじっくりと物事に取り組めることから、教育研究、ものづくり、文化の醸成等、様々なことに打ち込めるのが、「信州」の特徴である。信州大学は、信州の豊かな自然、その歴史と文化、人々の営みを大切に、「信州」を活かした種々の取組を行っている。附属図書館もキャンパス分散型大学という物理的形態と「信州」の特徴を意識した運営を行っている。

信州大学附属図書館の特色

信州大学附属図書館は、中央図書館と教育、医学、工学、農学、繊維の5つの学部図書館、計6館から構成され、各



信州大学附属図書館配置図

学問分野に必要な学術情報の体系的な整備、先進的な教育・研究環境の提供を目標に、各館の特徴を生かしつつ総合的なサービスを展開している。

学術情報は、どのキャンパスからでも利用できるよう、早い時期から電子ジャーナルや電子ブックなど、電子コンテンツの導入を進めてきた。電子コンテンツの多くは、自宅など学外からも利用可能となっている。さらに、コロナ禍によって授業の大半がオンラインとなったことに伴い、より積極的に学習用コンテンツの電子版を導入してきており、2020年度末現在、電子ジャーナル14,745タイトル、電子ブック130,500点を利用することができる。

学生の学びの場としての図書館



ピアチューターによる学習支援の様子(2018年)

信州大学の学生は、1年生は松本キャンパス、2年生以降は各キャンパスで過ごすため、中央図書館では、1年生を主な対象として、授業外での学習支援(ピアサポ@Lib)に、先輩学生・教職員との協働により取り組んできた。2011年から数学や化学などの学習相談を始め、2013年からはレポート執筆の支援も行っている。また、コロナ禍でキャンパスに来られなくなった学生のため、2020年6月にはオンラインでの支援も開始した。もともと、進学先の学部の教員や先輩と1年生とをオンラインでつなぐ検討をしていたので、比較的早く対応ができたのは幸いであった。同様の学習支援は、理学部や、工学部図書館、農学部図書館などでも取り組んでいる。

研究情報の発信基地としての図書館

大学図書館は、学内の研究成果の発信(オープンアクセス)に加え、最近では研究データ管理(オープンサイエンス)の役割も担うようになってきている。

機関リポジトリや研究者データベースをリンクさせた「SOAR」(信州大学学術情報オンラインシステム)の運用によって、2007年の機関リポジトリ開始以来、約2万件の研究成果を公開してい

る。これらのシステムは、国立情報学研究所が開発・提供するJAIRO Cloudや、同所の研究データ管理基盤GakuNin RDMを活用しているが、試験運用や先行運用の段階から積極的に参画している。

また、現在、「信州大学オープンアクセス方針」を策定中である。世界中の人々がアクセスできるよう、研究成果(論文やそれに付随する研究データ)を公開することで、本学の研究上の目標である「地域と世界への発信」を達成し、オープンサイエンスにむけた国際的潮流に歩調を合わせていく。

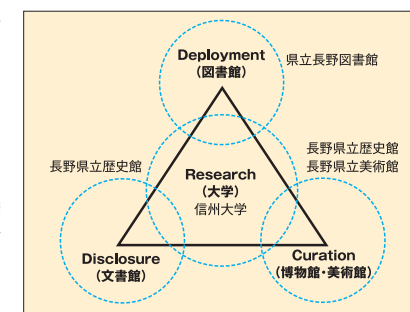


信州大学学術情報オンラインシステム「SOAR」

地域に開かれた窓としての図書館

大学図書館は、地域に開かれた窓としての役割も担ってきた。法人化以前から地域の人々に図書館を公開し、2008年以降は各キャンパスの近隣の市町村図書館と連携して、専門的な資料の提供を行っている。同時に、学生たちからの要望が高い小説などの書籍は、市町村図書館から提供いただいている。2009年には、松本市と連携した病院図書室も設置した。

2016年、県立の歴史館、美術館、図書館とともに「信州 知の連携フォーラム」を立ち上げた。いわゆるMLA連携(Museum, Library, Archives)の枠組みで、長野県における知と学びに関わる文化施設が、信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通して、人々の学びを豊かにし、地域創生につなげていく方策について語り合う場である。地域資料のデジタルアーカイブズの構築や人材育成を協働して行っており、各館が所蔵する資料だけではなく、地域の人々が持つ記録や記憶の収集・保存も視野に入れ、知識循環型社会で活用される環境を共に目指している。地域に根差した教育・研究機関として、大学が果たすべき役割は大きい。



「信州 知の連携フォーラム」関連機関の強み(例)



信州大学
歴史探訪マップ
(表紙)と
二次元コード

大学の「知」を支える信州大学附属図書館のマスコットとして、2011年12月6日、「信大ナナちゃん」が誕生。「信大ナナちゃん」は「本の虫」から連想した、ナナホシテントウがモチーフで、これまでにエコバッグやしおり、シールなど様々なグッズを制作。

地域の過去を現在・未来へと架橋する

2017年、信州大学に関わる歴史的資料を収集・整理・保存するとともに、公開・展示を行う体制を整えるため、附属図書館の下に大学史資料センターを設置した。

2019年、信州大学は創立70周年(前身校の一つである旧制松本高等学校は100周年)を迎えた。信州の地に期待を担って誕生した信州大学一。5つのキャンパスに展開する8つの学部は、それぞれの地域の人々や時代の要請によって設立された前身校の流れを汲んでいる。大学史資料センターでは、記念式典での展示や『信州大学歴史探訪マップ』の作成などを通じて、地域と共に歩んできた本学の姿を描き出した。これらの取組を通して、学生・教職員が大学及び地域への関心・愛着を深めるだけでなく、地域住民が大学に関心を持つきっかけにもなり、歴史(過去)を現在、さらに未来へとつなぐ学習・研究の場に附属図書館がなることを期待している。

このように、信州大学附属図書館では、学術情報収集だけではなく、情報発信、学びの場、地域との架け橋などとして重要な役割を演じている。また、オンラインで人と人をつなぐ中継基地となったり、オンラインによる学習・研究の基地局となったりしていくであろう。このような基地としての役割をすべての国立大学図書館が持ち、さらに連携することによって、大学間だけでなく地域間の交流を進めることが可能となる。Society 5.0において、図書館は、フィジカル空間だけでなく、サイバー空間でも重要な場として活用されていくであろう。



信州大学附属図書館中央図書館



【特集】進化し続ける大学図書館

OPINION

対話を育み、思索を深める、 人が主役の 大学図書館を目指して

大学の教育・研究活動を支える重要な知識基盤である大学図書館は、学術情報の電子化や学習スタイルの多様化など様々な変化を背景に、図書資料の貸し出しや閲覧にとどまらない幅広い役割が求められるようになってきている。

本号では、国内の大学図書館の中でも有数の歴史と蔵書数を誇る早稲田大学図書館の館長を務めるゲイ ローリー教授に、2020 年に大改修を終えて生まれ変わった同大学中央図書館の魅力や館長としての取り組みとともに、これからの大学図書館の課題やあり方などを伺った。

早稲田大学図書館長
早稲田大学法学学術院教授

ゲイ ローリー

日本有数の大学図書館のトップに、 外国人、女性として初めて就任

「私自身、これまで研究者として数多くの図書館を利用してきましたが、早稲田大学図書館は蔵書数にしても使いやすさにしてもトップレベルの施設です。中でも中央図書館は2020年春に開館以来の大改修が完了し、最先端に行く図書館として注目を集めています。館長就任は身に余る大役と感じましたが、身を投じて自分なりに努力することが恩返しになると考えて引き受けることにしました」

オーストラリア出身の日本文学研究者であるゲイ ローリー教授は、早稲田大学図書館の副館長を7年弱務めた後、2020年9月、第21代館長に就任した。同館初の外国人、女性館長である。

1882年東京専門学校が設置した図書室を前身とする早稲田大学図書館は、中央図書館と4つのキャンパス図書館をはじめ20をこえる図書施設からなる。蔵書数は日本の全大学の中で第4位の約580万冊を誇り、2019年9月、慶應義塾大学とシステム共同運用を始動したことにより、早慶合わせて1,000万冊以上の図

書館コンソーシアムを形成している。

「特に大きな魅力は、国宝や重要文化財を含む、日本の古代から近代に至るまでの文書や書簡といった一次資料や、江戸期に出版・書写された文献資料、さらには清朝ほかの漢籍や韓本などの古典籍が充実している点で、およそ30万点もの所蔵があります。加えて、研究目的であれば誰でも利用できる『古典籍総合データベース』も整備しているので、WEB上で多くの貴重資料の書誌・画像データを見ることができ、海外の研究者からも非常に高く評価されています」

教授の現在の研究活動にも、これら貴重な古典籍は存分に生かされていると言う。

新鮮な文化と本の力に導かれて、 日本文学研究者の道へ

本号特集のテーマは「進化し続ける大学図書館」であるが、まずは教授本人の足跡を紹介しておきたい。日本文学研究者とし

て、これまでどのように大学図書館と関わってきたのだろうか。

「初めて日本に来たのは1978年、ロータリークラブ奨学生として岐阜県の高校に留学しました。日本は自分で選んだ留学先ではなかったのですが、1年間の滞在中に、古いものと現代が調和する見たこともない文化や生活にすっかり魅了されました。日本文学に興味を持ったのもこのときで、きっかけはホストマザーに貸していただいた『日本文学史』という本でした」

一冊の書物との出会いによって進むべき道が開ける人は珍しくない。教授もその一人だ。

帰国後はオーストラリア国立大学日本研究学科で日本語・日本文学を専攻し、津田塾大学への留学も経験。大学を卒業した後は、日本政府の奨学金で日本女子大学の文学研究科に入学。与謝野晶子と源氏物語を題材に研究を進めた。

「日本女子大学時代には、資料探しのために国会図書館に通い詰めました。インターネットがない時代ですから、古い図書目録などをしらみつぶしに調べて必要な資料を見つけ出し、コピーをお願いして、日を改めて受け取りに行くという繰り返し。大変でし

たが、手間ひまかけて欲しかった資料を手に入れたときの感激は格別でした。今は便利になった分、こうした喜びは薄くなりました。何か大切なものを失った気もしますね」

その後、ケンブリッジ大学東洋学研究科で博士号を取得し、2000年には1年間、京都大学人文科学研究所にて招聘外国人学者として活動した。ここで国立大学図書館ならではの良さを実感したと言う。

「国立大学の多くは長い歴史を持ち、それぞれ地域の知の拠点にもなっていますから、蔵書は豊富で、地域に根差した収蔵物も充実しています。京都大学図書館の奥の深さにも感動しました。当時、私は中院仲子という江戸時代初期の宮女の研究をしていたのですが、京都大学には室町時代まで遡る『中院文庫』という、宝物のような資料があったのです。今はオンラインで閲覧できるようですが、当時は目録からして判読困難な手書きで、図書館の職員に手伝ってもらいながら一つひとつ読み解いていきました」

図書館で働く優秀な人材の存在が、利用者にとって学術研究の大きな支えになることを身に染みて感じた経験だった。

「快適過ぎて意味もなく長時間居座る場となることは望みませんが、学生が知的刺激を受け、好奇心や創造力がかき立てられる空間、学習や研究に気持ちよく集中できる空間に育っていけばいいと願っています」

質の高い職員の確保と、 情報リテラシー教育の支援は大切な課題

これからの大学図書館が求められる役割を果たしていくために、忘れてはならないポイントとして教授が強調するのが、専任職員の数と質を確保することだ。

「早稲田大学でも現在、他の多くの大学と同様に図書館の定型業務の外部委託を行っています。これにより開館時間の延長や図書館資料の郵送サービス実現など改善された部分も多いのですが、一定数以上の専任職員は絶対に必要です。専門知識が必要とされる図書館業務は、電子資料やオンラインコンテンツの充実化や世界各国からの問い合わせへの対応などますます増加する傾向にあり、人的余裕がなくなると新企画・新規事業に手が回らなくなってしまいます。また、たとえば本図書館の特別資料室には、『和本』の扱い方やちょっとした修復についてわかる職員が働いていますが、こうしたスキルも伝える相手がいなければ次代に継承できなくなる。これは大学にとって大きな損失です。図書館業務をどこまで外部委託し、専任職員はどんな役割を担うかを見極めた上で、必要な人材を確保することは、大学図書館共通の重要な課題と言えるでしょう」

その一方で、図書館を利用する学生の支援を強化していくことも、これからの大学図書館の大切な使命であると言う。現在、多くの大学図書館において、様々な形で情報リテラシー教育が行われているが、情報メディアの多様化など ICT の進化につれて、大量の情報から必要なものにアクセスし、その価値を判断して活用する能力の重要性は一層高まっている。

「早稲田大学図書館では、早くから『アカデミック・リエゾン活動』の一環として、図書館職員を教室に派遣し、図書検索や図書館活用の方法などを教える授業支援を行っているほか、オンライン版の情報リテラシーコンテンツも日本語と英語で制作するなどの取り組みを進めています。さらに、基礎から専門的なものまで様々なデータベースの使い方を習得するためのワークショップも、図書館の主催により開催しています。とにかく、いくら立派なハードを整備したとしても、大学図書館を価値ある場所として生かしていく主役は、利用者と職員という『人』にほかなりません。図書館長として周囲の指導と協力を仰ぎながら力を尽くしていきたいと考えています」

日本文学研究の第一人者のもと、新時代の図書館がこの先どのような発展の物語を紡いでいくのか。大いに期待が高まる。

ゲイ ローリー (Gaye ROWLEY) オーストラリア生まれ。1984 年オーストラリア国立大学アジア研究学部日本研究学科卒業。1987 年に日本女子大学文学研究科博士課程前期課程を修了。英国ケンブリッジ大学東洋学研究科にて博士号取得後、2001 年に早稲田大学法学部助教授に就任。2010 年より法文学術院教授。2012～2019 年早稲田大学図書館副館長、2020 年 9 月より館長を務める。専門分野は日本文学。特に「源氏物語」受容史、女性史。「与謝野晶子と『源氏物語』」、「An Imperial Concubine's Tale」など著書多数。



どのに伴い、多くの大学図書館で、人同士の相互作用を生み出すコミュニケーションの場としてラーニングコモンズを導入する動きが活発化している。早稲田大学図書館も、同大学が掲げる「対話型、問題発見・解決型教育への移行」という方針に定めるために、ラーニングコモンズの拡充を柱とする中央図書館の大改修を行った。

「これからの日本の大学教育の重要課題の一つは、問題解決力やディスカッション力を育成することです。今回の改修では、多様なスタイルで問題解決に向けた対話や討論ができる場を整備しました。今後、電子資料が増え、オープンアクセスが強化されれば、今よりもっと自由に図書館外部から文献・資料を閲覧したり利用したりすることが可能になっていきます。そうしたときに図書館という大きな箱を、単に資料を収蔵するだけでなく、教育の場として活用していこうというのが基本的なねらいです」

改修にあたっては、3 年かけてアンケート調査、観察調査、インタビュー調査を入念に重ねて利用実態やニーズを把握。その上で、これからのラーニングコモンズに求められる機能を明確にし、独自のプランを練り上げた。目指したのは、グループ利用と個人利用、活発に討論しながらの利用と静かに思索する利用のいずれもが共存しつつも、伝統的な図書館の雰囲気を維持した環境づくりだ。

「改修工事は、通常の利用に支障をきたさないよう、サービスを継続したまま 2 期に分けて行いました。2019 年完了の第 1 期改修では 2 階と 3 階に、クリエイション、ディスカッション、ブラウジング、ワークという異なる用途を持つラーニングコモンズを設置し、2020 年 4 月完了の第 2 期改修では、研究者同士の交流を促進して新たな成果創造を目指すリサーチ用途のコモンズや、グループ研究室などを整備しました。また、会話禁止の Quiet Area や、PC 利用までも禁止した Super Silent Area も設け、多様な利用スタイルに応える空間を実現しました。コロナ禍が続く状況下では、グループ利用の制限などを行っていますが、収束後に本来の目的に沿った形で運用されるのが楽しみです」

第 1 期改修の完了後に、同図書館で「ラーニングコモンズ設置の効果検証」を行ったところ、平均入館者数が増え、入館者 1 人ごとの滞在時間も伸びたことが確かめられた。近年、多種多様な人々の学びや交流の場として幅広い用途に使える「滞在型図書館」というコンセプトが注目されているが、その流れをいち早く具現化した図書館と言うこともできそうだ。

により、誰でも自由に閲覧できるオープンアクセスの仕組みを実現している。

「さらに、オープンアクセスを加速させているより大きな要因になっているのが、電子ジャーナル・電子ブックの購読拡大に伴う経済的負担増です。近年、大手出版社によるジャーナル市場の寡占と価格の高騰が進むとともに、消費税の増税や為替変動などが重なることで、大学の資料購入財源への圧迫は強まるばかり。特に研究の最新動向を把握するために電子ジャーナル購読が欠かせない理系の研究者にとって、問題はより深刻なはずです」

こうした経済的負担増に対処する手法として世界的に認識が広がっているのが、論文著者やその所属機関が出版社に出版コストを払うことにより、誰でも無料で閲覧できるようにする、新しいオープンアクセスのモデルである。欧州ではコンソーシアム単位で購読とオープンアクセス出版を組み合わせた契約が増え、アメリカでは個別の大学による出版社とのオープンアクセス契約が増加している。また、日本では、図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE) が、オープンアクセス出版モデルを実現するためのロードマップの策定などを進めている。

「早稲田大学図書館も、いくつかの出版社とこうした契約を結んでいます。ただ、大きな力を持つ出版社と一大学が交渉して、納得のいく契約にこぎ着けることは困難です。やはり国レベルで対策を講じていくことが必要でしょう」と教授は強く訴える。

アクティブな学習と伝統的な利用が 共存する、新時代の図書館が誕生

アクティブラーニングの導入拡大や図書館の利用形態の変化な

2001 年に早稲田大学法学部に助教授として着任。現在、教授として学生の指導にあたりながら、源氏物語の受容史や女性史をテーマとして精力的に研究を続けている。

「早稲田大学に来て嬉しかったのは、図書館が収蔵する豊富な古典籍の一次資料を、予約をすれば直接見られること。匂いや紙の質感を知ることやタイムスリップしたような気分を味わえますし、何より新鮮な発見やインスピレーションを得ることができます。これは研究者にとって大切なことだと思いますね」

情報の電子化がもたらす問題に 対処するために、国レベルの対策を

多くの「本物」に触れられることが図書館の魅力を高める一方で、電子化された学術情報を幅広く公開・提供していくことも図書館の重要な課題になっており、インターネットを通じて誰もが無料で情報を閲覧できるようにする「オープンアクセス」の動きが活発化している。「大学図書館の基本理念として、人類が培った知識は人類のものであるべきだ」という考えがあります。国民が払う税金の一部を大学の研究に回しているわけですから、国民はその成果を見る権利があるのです。インターネットが発達して、いつどこからでも情報を見られるようになった以上、大学はオープンアクセスを推進していく義務があるでしょう」

こうした考えに基づく早稲田大学図書館の取り組みが、機関リポジトリや前述した古典籍総合データベースだ。機関リポジトリは早稲田大学で生産された学術情報を保存し、学内外に発信することでオープンアクセスの進展を図っており、古典籍総合データベースは大学として独自の電子アーカイブシステムを構築すること



01 筑波大学 視覚障害等のある学生に向けた資料の電子化を推進

利用者の求めに応じて図書や学術文献を電子化し提供できる体制を整備

多様な学生が円滑にサービスを利用できる環境を整えることは、大学図書館においても重要な使命である。筑波大学附属図書館は、学内の障害学生支援部局であるDAC（ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリア）センターと連携し、視覚障害等で読書が困難な学生を対象に、利用者の求めに応じて図書や雑誌論文をPDFやテキストデータ化し提供する体制を整備。2017年度にサービスの試行を始め、2019年度より本格的な運用を開始した。利用者はパソコンで拡大表示したり、読み上げソフトで音声化したりしてテキストデータを活用する。

同大学アカデミックサポート課課長の山本淳一氏は「2016年に施行された『障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律』を受けた取組ではありますが、筑波大学には『開かれた大学』を目指し『柔軟な教育研究組織』と『新しい大学の仕組み』を実現するという基本理念があります。附属図書館もその理念に則り、学術情報基盤として教育・研究に必要とされる資料をあらゆる学生に提供することを図りました」と話す。

2021年5月25日までにPDF87件（図書61件・論文26件）、テキストデータ60件（同39件、21件）の電子資料を作成し、提供できる形にしている。



テキストデータ化の作業風景（2018年撮影）

学生の協力のもと きめ細かく膨大な作業に対応

資料の電子化の作業は、まず紙の資料をスキャンしてPDFを作成し、OCRソフトを使ってテキストデータ化するのだが、誤って変換される文字も少なくない。複数のスタッフが何度も文字校正を行い、テキストの精度を高めていく。

アカデミックサポート課多様化支援担当の中村洋子氏は「図書館職員だけで対応するのは難しく、どのような体制で運用していくか、DACセンターと話し合いました。結果、図書館で働く学内ワークスタディの学生と、同センターのピア・チューター（障害のある学生の支援活動に携わる学生）のチームが協力して作業を行っています」と説明する。

もう一つの課題は、テキストデータ化が困難な図表やグラフの扱いだった。自らも視覚障害がありながらピア・チューターを務める人間総合科学研究群障害科学学位プログラム2年の高橋利恵子氏は「学術書は『グラフ参照』という記載が多く、グラフの説明文を省略されると内容が把握で

きなくなります。その点は譲れません」と訴える。OCRソフトではテキスト化ができないため人が解読して説明文を作成するしかないが、専門分野の文献は知識がないと対応が難しい。「全学の学生がピア・チューターになれますし、学内ワークスタディも理系・文系の様々な学生がいます。それだけに学生が協力する意味は大きく、総合大学の強みが活かせると思っています」と高橋氏。



学生主体のピア・チューター養成講座（2018年撮影）

作成したテキストデータを 国立国会図書館にも提供

前述の法律の施行を受け、文部科学省や国立国会図書館が電子化されたテキストデータの提供を各大学図書館に呼びかけた。筑波大学附属図書館はそれに応じ、作成した全文校正済みテキストデータを国立国会図書館に対し31件提供（2021年5月現在）。それらは、同国会図書館の視覚障害者等用データ送信サービスを通じて、全国の視覚障害者等個人や図書館等に提供される。学内に留まらず、社会全体に貢献する取組となっているのである。

中村氏によると「視覚障害のある大学院の卒業生から『おかげで大変充実した研究活動や学習ができました。今後資料電子化がさらに充実することを願っています』というメールを頂きました」と話す。高橋氏を含め利用者からの評判は良好だ。

山本氏は「すべての学生に学術情報を提供することは、学習・研究の支援組織である図書館の役割。始まったばかりの活動ですが、まずは継続してその役割を果たしていくことが重要と考えています」と話す。高い学習意欲を持つ多様な学生のために、同様の取組が全国の大学図書館に拡がることを願う。



左：山本 淳一（やまもと じゅんいち）
筑波大学 学術情報部
アカデミックサポート課
課長
中：高橋 利恵子（たかはし りえこ）
筑波大学 学術情報部
人間総合科学研究群
障害科学学位プログラム2年
右：中村 洋子（なかむら ようこ）
筑波大学 学術情報部
アカデミックサポート課
多様化支援担当

02 千葉大学 空間・コンテンツ・人的支援を有機的に結合する支援基盤を構築

「図書館の支援」を超える きめ細かな対応を実践

千葉大学では2011年、図書館を基盤に「空間」「コンテンツ」「人的支援」を有機的に結合して学修支援を行うアカデミック・リンク・センターを設立。現在では学部生のみならず大学院生、教員、職員までを対象とした教育・学習・研究の支援をトータルに行っている。

竹内比呂也附属図書館長は、「以前から情報メディア基盤センター（当時）と共働してICTを装備した新図書館をつくる計画はありました。2008年に文部科学省の中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて』（答申）が提言されたことを機に『考える学生の創造』を目指した支援活動の基盤として同センターを創設したのです」と説明する。

活動の領域は広範で、近年は、学修支援ポータルサイト「Encourage YOUR e-Learning!（以下：EYeL!）」、図書館が公開・提供するコンテンツを利活用できる「千葉大学学術リソースコレクション：c-arc」、オンラインによる英語論文の作成支援など、ウェブを活かした取組の一方で、職員の高度化を図る「ALPS教育・学修支援専門職養成履修証明プログラム」などリアルでの活動も展開する。

支援の内容は深い。例えば英語論文の作成支援は校閲結果を本人に戻すだけでなく、「言葉のニュアンスから書き方まで外部のスペシャリストがマンツーマンで指導します」と國本千裕同センター特任准教授は話す。

また、「大学教育の在り方にまで踏み込むのは図書館の仕事ではない」という議論はあると思います。しかし、学習者一人一人と向き合い、そのニーズをいかに満たすかが図書館の使命。そこに学習支援の可能性があり、その際蓄積してきた学術的リソースを活かすべきと考えています」と竹内館長は話す。



英語論文セミナーの様子（※）

教員・職員・学生が 三位一体で支援を充実化

「EYeL!」は、職員の小林裕太氏がサイトの立ち上げから運用までのシステム面を担当。同氏はもともとウェブの知識があったわけではなく独学で身につけたという。「図書館の本質は変わらなくても、表層的な在り方は時代とともに変化していきます。図書館職員は支援の専門職ですから、変化に対応できるように学び続ける必要があります。その姿勢で仕事に取り組む先輩方の背中を見て、自分もスキルの向上に努めてきました」と話す。具体的な職員研

修のない業務もあるが、自己成長を促す環境が意欲あふれる職員の養成につながっている。

「学修支援のコンテンツは、職員だけでも教員だけでも作れません。まず教員が草案を作り、職員がサイトに実装する際『これでは読みにくい』など忌憚なく意見を述べ、さらに学生スタッフが『もっとこうしてほしい』と当事者の立場でリクエストします。教員・職員・学生が連携し支援を充実させているのです」と國本特任准教授は説明する。

リアルの場の「豊かさ」と オンライン環境の融合を目指す

新旧の図書館をいずれも体験している人文公共学府博士後期課程3年の出川英里氏は、「以前は『黙って勉強する場所』というイメージでした



自主的なグループ学習を行う学生たち（※）

が、今は話し合いながら勉強できるスペースがあり、自主的に勉強会を開くこともできます。自由度の高い環境も魅力です」と話す。

竹内館長は、「偶然いろいろなものを見つけて刺激を受けることができるリアルならではの場づくりも意識しています」と話す。今後の課題もまさに「e-ラーニングの環境とリアルの学習の場をどのようにしてつなげるか」だという。「リアル空間がもたらす『豊かさ』は、キャンパスの命そのもの。オンライン環境がメインとなっても『豊かさ』を実現することがテーマです」。

揺るぎない活動基盤を得て、同図書館が今後どのような支援を作りだしていくか注目したい。



中左：小林 裕太（こばやし ゆうた）
千葉大学 附属図書館 図書系職員
中右：竹内 比呂也（たけうち ひろや）
千葉大学 副学長・人文科学研究院
教授・附属図書館長・
アカデミック・リンク・センター長
左：出川 英里（でがわ えり）
千葉大学 人文公共学府人文公共学専攻
人文科学コース博士後期課程3年
右：國本 千裕（くにもと ちひろ）
千葉大学 アカデミック・リンク・センター
特任准教授

※写真はいずれもコロナ禍前に撮影したものです

03 浜松医科大学

学修を支援し卒業生や地域にも開かれたSociety5.0型図書館へ



浜松医科大学スマート・ライブラリ

自律的な学修を支援するために 紙から電子への転換を英断

増え続ける蔵書が書架の狭隘化を招き、管理にも多大な労力がかかることは多くの大学図書館が抱える悩みと言える。浜松医科大学では、その問題を解消すべく2019年に図書館の全面改修を行った際、「スマート・ライブラリ」をコンセプトにSociety5.0時代にふさわしい図書館への刷新を図った。多様な学修スペースとともに情報・コミュニケーション機器も備え、資料も紙から電子中心へと方針を転換。情報の収集・保存に留まらず、情報の生成・発信という新たな役割と機能を有する施設に生まれ変わった。

同大学学術情報課課長の加藤淳一氏は「本学の使命でもある『医療人材育成に欠かせない自律的な学修の支援』を実践するために、電子資料の重点的な収集、eラーニング教材の作成・供給、さらに動画教材などを活用した最新医療の習得支援を図書館として提供することを目指しました」と話す。

計画の策定にあたって特に議論されたのは、蔵書の処分の問題。加藤氏は「医学や看護学の場合、古い情報はむしろ害悪になる可能性もありますが、資料の保存は図書館の重要な使命です。ある教員からは『高潔な人格形成のための図書を処分するとは何事か』とお叱りも受けました。しかし、成功か失敗かはあとにならないとわからないこと。このままでは時代に乗り遅れてしまうため勇気をもって前に進み、万一失敗だったとしても将来の教訓になれば意味があると考えました。蔵書のメンテナンスにかかる費用なども提示して、最終的には反対した教員にも納得していただきました」と説明する。

留学生や潜在看護師など 多様な背景を持つ人々の支援も

浜松医科大学のスマート・ライブラリは様々な特長を持つ。一つは全館24時間利用可能であること。学生、教職員、さらに卒業生や地域の医療従事者も申請・登録すればいつでも図書館を利用できる。

学修スペースも多彩で、英語のスピーキングの練習などに適した吸音材使用の部屋、動画の撮影・編集機材を備

えたスタジオ、留学生など多様な背景を持った学生に対応すべく礼拝室や授乳室として利用できる個室も用意されている。人気が高いのは、学生同士で医師役・患者役になって実習の予習・復習が行えるワークルームや、Wi-Fi環境や電子黒板を完備し勉強会などに利用できるディスカッションルームなどである。

その一方で、学務課と連携した学修支援システムにより講義動画のオンデマンド配信も行い、本年6月現在で約4,000コンテンツを提供。また、学内研究の網羅的なオープンアクセスも実施し、すでに1,300件の研究が登録されている。

さらにリカレント教育の一助として、卒業生に向けた学外文献複写取り寄せなどのサービスを提供。今後は、資格を持ちながら現在は仕事に就いていない「潜在看護師」の支援も検討中とのこと。「医療について調べたい、もっと知りたいと思う方々が、気軽に資料にアクセスできるオープンな図書館にしたいと考えています」と加藤氏。

地域社会に開かれた 身近で便利な大学図書館へ

大学図書館がコンセプトを一新し、卒業生や地域の医療従事者なども活用できる場となったことで「職員も学外にアンテナを張り、地域社会がどんなことに興味を向けているかを意識するようになったと感じます。とても風通しの良い図書館になりました」と、加藤氏はスマート・ライブラリ化のもう一つの効果を語る。「医科大学の個性を生かしつつ、よりたくさんの方々に『大学図書館は本が置いてあるだけでなく、調べ物が気軽にでき、便利な機能もたくさんある』ということを認識していただけるように、今後も取り組みたいと思っています」。

医科大学の附属図書館という位置づけを明確にしながらも、Society5.0時代において幅広い人々に開かれた図書館へと進化を続けていくことが期待される。



加藤 淳一（かとう じゅんいち）
浜松医科大学 学術情報課 課長

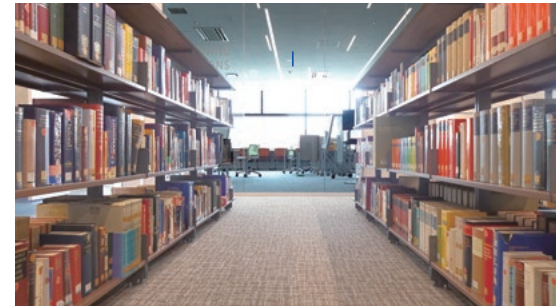


動画の撮影・編集機材を備えたスタジオ

04 大阪大学

大学図書館と公共図書館が一体化した、新たな社会連携の形

国内初、指定管理者として 国立大学が公共図書館も運営



各国語の辞書が並ぶ参考図書コーナー

利用者の満足度を向上させる多様で質の高いサービスの提供は、大学図書館に限らずすべての図書館にとっての課題と言える。大阪大学は、箕面キャンパスの移転に伴い、箕面市が新キャンパス隣接地に整備する複合公共施設内の図書館と生涯学習センターについて、その管理運営を行うことで2016年に同市と合意した。そして、2021年5月1日、大阪大学附属図書館外国学図書館の約60万冊、箕面市立萱野南図書館の約11万冊の蔵書を併せ持った箕面市立船場図書館が開館。国立大学が指定管理者として無償で管理運営を行うという、国内初の取組となった。

大阪大学附属図書館の尾上孝雄館長は「大阪大学には研究の発展、学習環境の向上という目的があり、また箕面市は市民の知的環境を整えとともに活気ある街づくりを目指しています。本学が運営する特性を活かした蔵書や図書館サービスを多様な利用者に活用していただくことで、大学にも地域社会にも成果を還元することが期待できます」と話す。

大きな期待の背景には、箕面キャンパスならではの特徴もある。古川裕副館長は「ここは、外国語学部や言語文化研究科、留学生を受け入れる日本語日本文化教育センターがある国際色豊かなキャンパス。市民向けに外国語の絵本の読み聞かせ活動や講演会などを行い、そこに在学生や留学生が参加して地域交流のハブにしていくことも目指します」と説明する。

また、長い歴史に育まれた資産も多い。「外国学図書館は1921年に設立された大阪外国語学校がルーツで、100年間に蓄えた貴重な書物を継承しています。それらも市民に向けたアクティビティとして活用していく方針です」と尾上館長。



大阪外国語学校旧蔵のモンゴル語仏典

幅広い利用者のために 年間350日以上開館

大学図書館と公共図書館の二つの側面を併せ持つため新たな課題もある。尾上館長は「図書館としての機能やステークホルダーが根本的に異なります。例えば、大学図書館は平日、公共図書館は土日の利用が多く、双方の開館日を合わせたところ休館日は年間14日だけになりました」と話す。従来、同外国学図書館の休館日は年間60日程度。そのため人的リソースが必要となるが、「大学図書館部分と公共図書館部分を分けたりせず、全館同じ開館日にこだわりました。すべての利用者の方にすべての機能を使っていただくことが新しい図書館のコンセプトなので、そこまで踏み込むことは大切だと考えています。また、国立大学の図書館は『国の資産』と言えますが、キャンパスの中だけにあっては地域への還元は進みにくいもの。大阪大学には他に三つの附属図書館がありますが、それらも巻き込む形で、今まで集積してきた知を学外と共有し、大学の良さを知っていただく機会とすることも取組の一つのビジョンです」とも語る。

「こんな図書館で働きたい」と 思われるスキルアップの場に

当面、指定管理者である大阪大学の職員が新図書館の業務を行うことになるが、一般市民という新たなステークホルダーへの対応をいかにこなしていくかも大きな課題である。尾上館長は「今まで経験のないサービスを実施するのは、多くの職員にとってチャレンジだと思います。ただ、ここで蓄えた新しい知見は再び通常の大学図書館で働くことになった際の糧になり、さらにスキルアップできるという意識を持ってもらいたいと願っています。そして、図書館職員を志すすべての方々から『ここで働きたい』と思っていただけるようなモデル的な施設にしたいと思っています」と抱負を語る。

本年5月に船出したばかりの新しい図書館が、教員、学生、職員、さらに市民といった多様な人々の知的好奇心をどのように満たし、新たな交流を生み出していくか楽しみである。



古川 裕（ふるかわ ゆたか）
大阪大学 附属図書館
副館長（外国学図書館担当）・教授

尾上 孝雄（おのえ たかお）
大阪大学 理事・副学長・附属図書館
館長・教授

